

## [課程—2]

### 審査の結果の要旨

氏名 齋藤 あや

本研究は、乳幼児の予防接種に関して保護者が接種に関してリスクとベネフィットを基に、最善の意思決定が可能となるよう標準化された教育内容を3つの周産期時期（①妊娠後期、②産後退院時、③生後1か月時）に提供し、その効果を検証するため、周産期の母親を対象にクラスターランダム化比較試験を行ったもので、下記の結果を得ている。

1. 段階的な予防接種教育を受けた群では、介入期間終了後の生後6か月時点での接種スケジュール遵守状況が教育的介入を受けていない群に比べて、定期接種ワクチンである全てのヒブ、肺炎球菌、四種混合ワクチンにおいて、有意に早く接種が完了していた。接種状況に関して、ワクチンの種類別では、ロタ、ヒブ、肺炎球菌、B型肝炎は2群間で有意差は見られなかったが、四種混合は教育を受けた群で接種率が有意に高い結果だった。
2. 教育的介入による知識・態度・信念の変化に関して、介入前から生後1か月時点、生後6か月時点と3時点での経時的な得点の変化量は知識のスコアが介入群で有意な上昇がみられた。態度・信念に関しては、すべての項目で事前事後で経時的な得点の推移に有意な変化は見られなかったが、介入前と生後1か月時点での2時点での比較では、介入群が「社会的規範」が介入後に有意に高い結果となった。

以上、本論文は、周産期から段階的に乳幼児に必要な予防接種教育を実施することで、有意なスケジュール遵守率、一部ワクチンの接種率の上昇、知識が向上することで可能性があることを示した。ここで得られた標準的な予防接種教育内容は、今後、さらに複雑化する可能性のある乳幼児期の予防接種教育の基本的な情報となりうる。そして、それらが社会全体に提供されることによって、より効果的な情報提供の実施が可能となり、最終的に接種率の向上、そして社会全体からのワクチンで予防できる病気の減少に寄与できると考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。